

**最近、数が急に減ったプランクトンの紹介**  
**アウラコセイラ ニッポニカ (旧メロシラソリダ *Melosira solida*)**



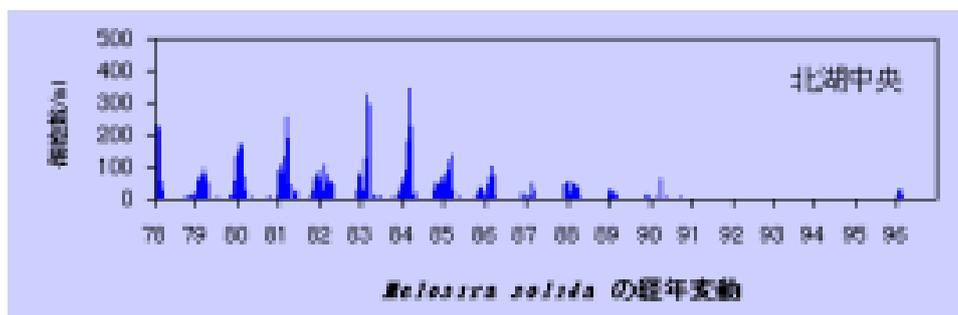
(写真1)



(写真2)

このプランクトンは、珪藻(けいそう)という仲間のプランクトンで、ガラスのような殻(から)を持っています。殻はとても厚く、鎖のようにつながって群体を形成するのが特徴です。日本では琵琶湖だけに分布し、かつては琵琶湖の代表的なプランクトンのひとつでした。水温の低い時期に多くみられ、浮遊生活を送りますが、水温の高い時期には湖底で夏を越します。写真1は湖底表面の泥から採集したアウラコセイラ ニッポニカで、葉緑体(光合成をする器官)が湖面付近で見られるものと比べると小さいようです。また、写真2は、とてもめずらしいアウラコセイラ ニッポニカの増大胞子(細胞の若返りのためにできるとされる大型の細胞)です。

このプランクトンの仲間は、死んだ後も殻が壊れずに残るのですが、琵琶湖の底にたまった泥をみると、古代から現在にいたるまで、どの地層においてもこの種類の殻が多量に観察されることが知られています。1985年頃までは、1月から3月頃の冬季に北湖全域に多くみられ、毎年のように優占種となっていました。図に示したように、その後、約10年間で急激に減少し、最近ではあまり観察されなくなりました。



〈お問い合わせ〉

滋賀県琵琶湖環境科学研究センター Tel : 077-526-4800 Fax : 077-526-4803 メール : info@lberi.jp

Copyright (C) Lake Biwa Environmental Research Institute. All Rights Reserved.